

2章1節～

ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らずに、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。——律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。——私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。もし、あなたが自分をユダヤ人ととなえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいつつながら、自分は神殿の物をかすめるのですか。律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか。これは、「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている。」と書いてあるとおりです。もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょうか。また、からだに割礼を受けていないで律法を守る者が、律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか。外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。

1 宗教人も有罪である

第1章において、パウロは裁判を想定し、彼自身を検事とし、異邦人、宗教を持っていない人、また、宗教は持っていて、まことの神を礼拝せずに偶像を礼拝している人達を、被告人として訴えています。彼らは神について知っているはずである。被造物を見るなら、その中に神様の目に見えない本性、永遠の力と神性は、明らかに啓示されて知られるではないか。それなのに、神を認めず、神を神としてあがめず、その代わりに偶像をつくり、拝むようになった、と糾弾しているのです。彼らには性的な混乱が起こり、そのほか諸々の悪が起こった。だから、異邦人は有罪で、死罪に値する、とパウロは言いました。

ところが2章で、何と彼は矛先を変えて、もう一人の被告人を攻め立てています。その被告人の名前はユダヤ人、宗教的な人、律法を熱心に行う人、宗教人に向かって、彼は訴えるのです。

2章7節 「忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え」、これは人が、ユダヤ人でも、クリスチャンでもなく、宗教を持っていなくても、もし忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを追求していくなら、神に出会うはずだ。宗教とか、教会というカテゴリーの中ではないかもしれないけれど、そのように神に出会う人もいる。そして神は、永遠のいのちを与える。

一方、まことの神を知っていると自称するユダヤ人であっても、特にユダヤ人は党派心が強い人達でしたが、党派心を持ち、真理を知っているのに、真理に従わないで不義に従う者には、怒りとさばきが下される。もし人が、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人のように宗教に熱心だろうと、まことの神を知らないギリシャ人であろうとも、善を行なうすべての人にある。神にはえこひいきなどはない。法廷においては、えこひいきは認められないのです。殺人を犯して裁かれる時に、私はユダヤ人ですと言っても、私はクリスチャンなんですとか、教会に熱心な者ですと言っても、全く意味がありません。アメリカ人であろうと、日本人であろうと、韓国人であろうと、法廷においては、同じ基準でさばかれるのです。

だから、ユダヤ人達よ、あなたは有罪である。神はえこひいきすることはないと、パウロは自分の民に向かって厳しい宣告をしているのです。

「律法なしに罪を犯した者」、日本人は旧約聖書を持っていないので、律法なしに罪を犯すのですが、その人達は律法なしに滅びる。ユダヤ人のように律法を持っている者は、律法によって裁かれて、同じように滅びが来る。律法を持っているか、持っていないかではなく、どのように生活したかが問われるのです。律法を持たない異邦人が、生まれつきのまま(ユダヤ人にも、クリスチャンにもならなくても)、律法の命じる行いをするなら、自分自身が自分の対する律法である。律法を知らなくても、神様が私達をつくり、私達の心をつくったので、私達は何が善で正しいかということを知っているはずなのです。その心の律法のままに生きるなら、神は恵みを与え、報酬を与える。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが、石の板や紙の上に書いてあるのではなく、彼らの心に書いてあることを示している。彼らの良心も一緒になってあかしし、彼らの思いは互いに責め合ったり、弁明し合ったりしていると書いてあります。

2 日本人は、宗教が怖い。

宗教は怖いと言われます。最近、渋谷で統一教会の霊感商法が行われ、数名が逮捕されたことが報道されました。また、忘れることができないのはオウム真理教です。弁護士の家族を「ポア」と言って、家族全員を、幼子まで殺してしまいました。さらに多くの人々を殺し、ついには地下鉄で、何百人も、何千人も死ねばよいと、サリンのガスを蒔きました。12人が死亡、約6000人が重軽傷を負い、多くの者が今も後遺症で苦しんでいます。彼らはハルマゲドンという聖書のことばを利用して、世界戦争を起こすのだと、宗教の名のもとに、とんでもないことを考えたのでした。

日本人が「宗教は怖い」と言うのは、無理がないと思います。カルト集団もかなりありますから。エホバの証人のように洗脳するものもあり、怖いです。

私達は、世田谷チャペルの建物を買いました。古い、いかめしい建物だったのですが、改築するのに、誰でも、いつでも覗けて、私達がやっていることが、外からいつでも見えるようにしようと考え、表をガラス張りにしたのです。この地域に、突然ホライズンという宗教が入って来て、怪しく思われるのを懸念したためです。ガラス張りにしたのは、宗教は怖いということばに対する、私達の応答だったのです。

3 911の背景

国際世界に目を向けるなら、イラク戦争がまだ続いています。アメリカとイラクの戦いの背後には、イスラム教とキリスト教の戦いというイメージがあります。イスラム教徒やアラブの人達は、イスラエルが憎いのです。シリアなどはイスラエルの存在を認めず、イスラエルは消し去るべきだと言っている。イランが原子爆弾を開発するのは、イスラエルの上に落としたいのです。彼らの論理は、アメリカが憎きイスラエルを助けているので、

彼らは軍備を整えることができるのだ。我々、イスラム教徒がこんなに貧しいのに、キリスト教徒は、あんなに富を享受している。アメリカが憎い。キリスト教徒が憎い。そういう構図ができて、911が起きました。そしてすぐに、テロの撲滅運動が起きました。

実にあのことによって、アメリカが変わってしまったことを色々なところで気がつくのです。

911を指揮したのは、ビン・ラディンだということで、アメリカはアフガニスタンに行き、彼を捜した。その頃、ブッシュの人氣がうなぎ上りで、歴代大統領の中で最も人氣ある大統領になったのです。勢いに乗ってしまったことが、失敗の原因であったのだと思います、「イラクには生物兵器がある。細菌兵器があるはずだ」と言いました。多くの反対者が、「まず、あるかどうか確認しなければならない」ということで、調査団が送られ、何十日もかけて調べたが、見つからない。にもかかわらず、「必ずあるはずだ」という想定のもとに、先制攻撃をしかけたのです。結局、化学兵器、生物兵器は、まだ見つかっていません。自分達は、ピンポイントで爆撃できるので、市民を殺したり、老人や女や子どもを殺すようなことは決してしない。敵の建物だけを破壊するのだと主張して、戦争は、恐らく一週間程度で終わるだろうという説明のもとに攻撃を開始しました。

しかし、誤った爆撃のために、多くの市民、老人、子ども達、女達、無罪の人達が死んでいきました。その人数は数えきれません。アメリカの若者も、多くの者がいのちを失いました。泥沼化してしまっ、手がつけられない。今でも、爆弾テロが起こっていて、テロリスト達を滅ぼすことはできなかったのです。オバマさんは、どうやってイラクから上手に手を引くかと苦悩しています。

ブッシュ大統領は、退陣した時には、歴代で最も人氣の低い、評判の悪い大統領としてやめていきました。

残念ながら、アメリカの福音派と呼ばれるクリスチャンが戦争を支援したのです。アメリカにはそういう素地があります。絶対に平和を守るという考え方は弱いのです。核兵器を持っており、軍隊を持っている。こういうものを開発する限り、軍部としては使いたいのが当然ですが。

これらのことが起こった背後には、キリスト教対イスラム教の対決の構図がありました。

4 唯一神教徒の危険性

パウロもユダヤ人で、「自分は正しい。律法による義についてならば非難されるところのない者だ」と言いましたが、「キリスト教が憎い。滅ぼさなければいけない。神の栄光のため、ユダヤ教の存続のため、キリスト教を撲滅するのだ」と言って、大迫害を行いました。議論するとか、紙に書いて過ちを指摘するのではなく、暴力に訴えて、キリスト教徒を捕えてはエルサレムに連れて来て、牢に入れ、ある者は殺すという手段に出たのです。

私達、唯一神教徒は、寛大ではないことを、よく知らなければいけません。戦争しやすい精神構造を持っているのです。「私達は正しい」と言うと、当然「あなたは間違っている」となる。だから、あなたが変わらない限り、いじめて、痛めつけて、攻撃するのだ。殺すのだ。あなたと戦争するのだというわけです。

クリスチャンは唯一神教徒です。イスラムも、ユダヤ教も、唯一神教です。私の意見では、私達は同じ神を信じていると思います。同じ唯一の神を信じているので、本当は、私達は兄弟姉妹であるべきなのです。皆、アブラハムの系図から生まれました。クリスチャンはアブラハムを信仰の父と呼び、ユダヤ人はアブラハムを父と呼び、イスラム教徒達もアブラハムを自分の父と呼んでいるのです。にもかかわらず、憎しみが絶えない。唯一神教を持っている我々は、人をさばきやすい性質を持っているということをよく知らなければいけないと、私は思います。

5 他人をさばく人よ

「すべて他人をさばく人よ」、宗教に熱心であったり、律法に熱心であればあるほど、そして落ち度のないクリスチャン生活をし、落ち度のないユダヤ人生活をしている人々は、どうしても人をさばく傾向が出てくるのかなということです。私達クリスチャンも、寛大さ、柔軟性が欠けていることを知って、自分に警告を与えなけれ

ばいけません。個人レベルにおいても、私達は人の弱点や、失敗や、弱さが気になって、それをさばくような傾向が出てくることのあるのです。

十数年前、教会において、非常にレベルの低いさばき合いが行われました。異言を話すとか、話さないとかいう一つのこと、互いに拒絶し合い、相手を低く見るようなことが真剣に行われていたのです。

ですから、パウロは宗教的に熱心な人を想定して、「すべて他人をさばく人よ」と言いました。パウロも律法に熱心になるあまり、他人をさばいていましたから、宗教熱心であることは、他人をさばきやすいということ、彼はつくづく体験し、「あなたは他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている」と言ったのです。チャック・スミス先生は、「私達が人に指をさすなら、三本の指は自分の方に向いている」とよく言われました。人をさばくと自分がさばかれる。自分をさばいているから、他人をさばくということなのです。

6 ユダヤ人に注がれた慈愛

ところがユダヤ人に対しては、特別に神様の慈愛が与えられるとパウロは言います。「それとも神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで」と書いてあります。神の慈愛はヘブル語で「ヘシッド」と言います。新約聖書になると「アガペー」です。ヘシッドは、英語では”loving kindness”という美しいことばに訳されています。神様が私達に愛をもって親切にしてくださる。好意を行ってくださる。慈愛というのは、「あわれみ」”mercy of God”という意味でもありますが、カトリックにおいて最も重要なことばは「キュリエ エレイソン、私をあわれんでください」、「あわれみ」というのが最も大切なことばなのですが、旧約聖書において一番大切なことばは、何と「ヘシッド」すなわち、あわれみ、慈愛なのです。

神様はこの慈愛、あわれみを、ユダヤ人に豊かに注いだとパウロは言います。

7 十戒に見る神のあわれみ

金曜日に名古屋でエジプト記を教えています、今回は、十戒が与えられた場面でした。メッセージが終わると「平野先生、こんな十戒のメッセージを聞いたのは初めてでした。今まで、神様は厳しいお方で、人をさばいたり、叱りつけたり、責めたりするために律法を与えたのだと思っていたのですが、先生のメッセージを聞いて、そうではないことがわかり、嬉しくなりました」と言われました。

神様が十戒をくださったのは、エジプトを出て50日目、ペンテコステの日です。荒野を歩いて、シナイ山に着き、3日経ってから、神様は彼らと契約を結びました。イスラエルは、今までは民族でしたが、初めて国家として生まれ、国家として神様と契約関係に入るところです。そこで、神は彼らに向かって、「わたしはあなたがたを宝とする」と言われたのです。あなたがたはかけがえのない存在であり、わたしにとって最も大切な存在で、あなたはわたしにとって宝となるのだ。

そして、「あなたがたを祭司とする」、すなわち神と人との仲保者、神と人の間に立って、赦し、恵みを伝える役割を持つ者とすると言いました。あなたがたイスラエルは祭司の国であって、神であるわたしの赦し、わたしのあわれみ、わたしの愛、わたしの恵み、わたしの祝福を、わたしは、あなたがたイスラエルを通して異邦人に伝えると言われたのです。

さらに、「あなたがたは聖なる国だ」と言ったのです。聖なるというのは、神様のものという意味です。神様のものは皆、聖いのです。「あなたはわたしのものだ」と神様はおっしゃったのです。

そして、この神は「わたしはあなたをエジプトの国、奴隷の家から解放した神なのですよ」”I am the Lord God, who delivered you from the bond of slavery.”と、神様は十戒を与え、契約関係に入る前に自己紹介をして、自己を明確にされた。「わたし」というのは誰か。わたしはあなたがたを奴隷の立場から解放した神なのだ、と。

私は「イエスと囲む食卓」という本を書きましたが、「解放者イエス」という題をつけた方がよかったかな、と今も時々思います。イエス様は「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれるこ

とを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」と言いました。イエス様のミニストリーは解放のミニストリーで、病から解放し、罪意識から解放し、恥から、劣等感から解放するミニストリーをする。だから解放者なのです。神が、イスラエルを奴隷の家エジプトから解放したのは、同じことです。

それから十戒に入ります。

第一番目は、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」

これを理解するのは、簡単です。夫が妻に向かって「あなたは私の妻、私のもの、宝だよ。私はあなたを愛し、あなたに忠誠を尽くし続け、あなたを助けるよ。あなたはかけがえのない存在だから。私は、あなたを見離さない。見捨てない。すこやかな時も、病める時も、富める時も、貧しい時も、いつも私はあなたの味方だ。だから、あなたは他に男をつくってはいけないよ」というのと同じなのです。神様は、「他に神を持ってはいけないよ。私はあなたに忠節を尽くし、あなたを第一にするのだから、あなたもわたしを第一にするのだよ」とおっしゃっているのです。

第二番目は、「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。」

偶像というのは塊です。石の塊、木の塊、金の塊、銀の塊。神様は生ける神、ダイナミックな、動いている神、息をしている神。その神を、息のない、動かない、目があっても見えない、耳があっても聞こえない、口があっても語るできない塊につくってはいけないのです。

これを拝んではいけない。私達は拝む者と似てくるからです。塊を拝むなら、私達も固まってきてしまいます。目の見えない偶像を拝むなら、私達の間も見えなくなります。町の光景は目に入るでしょうが、心の目で生けるまことの神を見たり、イエス様を見たり、霊の恵みの世界、祝福の世界を見たりすることができなくなり、そんなものには関心がなくなってしまうのです。耳で聞くことも、テレビタレントのことばは聞くでしょうけれど、聖書のことばは聞くに堪えなくなって、説教はつまらなくなる。そして偶像礼拝すると、私達は語れなくなるのです。妻に対して、夫に対して、親に対して、子どもに対して、友達に対して、私達はことばを失ってしまいます。だから拝んではいけないのです。

そして、「わたしはねたむ神」と書いてあります。I am the jealous God. “jealous”とは、嫉妬するという意味です。私は嫉妬する神だと言われると、あまり嬉しく感じないかもしれません。しかし、妻が夫に向かって、「上司が私をとてかわいがってくれて、来週、ニューヨークの旅に行こうって誘われたのよ。ブロードウェイのミュージカルを見て、最高のホテルに泊まって楽しもうよ、と言うの。行ってくるわ」と言った時、夫が「よかったな、それは。行ってらっしゃい」と言ったら、夫は理解があるのではなく、あなたを愛していないのです。愛していたら、必ず嫉妬するでしょう。神は、あなたを愛しているから「嫉妬する」と言うのです。「わたしはあなたを愛し、宝とし、あなたを第一としているのに、あなたの目がいつもわたし以外のものに向いて、他の神々を拝むなら、わたしは嫉妬するのだ」と言うのです。それほど、私達を愛してくださる神であり、それほど関係を重んじ、それほど契約を重んじる神だということです。

「主の御名をみだりにとなえてはいけない」と書いてあります。あなたは、大好きな人、尊敬する人の名前をみだりに使うことは決してないと思います。あなたの尊敬する人が他の人にも尊敬され、他の人にも愛されるようにして、その人の名前を使うはずです。

第四番目は「安息日を覚えてこれを聖なる日とせよ」。私はこの教えほど、神様のあわれみ、ヘシッドが現われている教えはないと思います。絶対、「これは神だよな」と思います。「働け、働け」ではなくて、「休みなさい」と書いてある。休むんだよ。家族と食事をする。家族で遊ぶ。或いは、ディズニーランドに行ってみよう。

安息することには、礼拝も含まれます。礼拝をすると、神様の霊と、私達の霊の結びつきが強くなるのです。そして幸福になります。神様の霊のいのちが、私達の霊の中に流れ込んで、スピリットが強められ、私達のエモーションや、メンタルな面が強められ、からだが強められて、神様を礼拝すると、私達は本当の意味で安息をすることができるのです。

このことが、「聖日を厳守しなければいけない」とされてしまうのですが、そうではありません。私達が霊的恵みの活力を受け、安息するためにこれを守るのです。「わたしはあなたを大切にし、あなたとの交わりを大切にしているのですから、あなたもわたしとの交わりを大切にしてください」と神はおっしゃっているのです。神は、私達家族がそろって「お父さん」と来るのが一番嬉しいと思います。私も親ですから、よくわかります。自分の家族、子ども達が来て「お父さん」と言って、一緒に食事したら、親として一番うれしいのです。私達がこのように、一つ所に集まって、声を一つにして「お父さん、ありがとう、感謝します」と言うなら、天の神様はとても嬉しいのです。

その次は「あなたの父と母を敬え」。当然ですね。私達は両親から生を受け、両親に育てられたのですから。それぞれ完璧な両親ではなくて、皆さんは不平不満もあるでしょう。しかし、あなたが一人の大人になるために、どれだけの愛が注がれ、どれだけの努力、また経済が注がれて、私達は大人になることができたのでしょうか。私達が生き続けることができたのは、相当の愛が注がれたということです。敬うのは当然です。

これら一つ一つは、厳しい教えでしょうか。そんなに神はきついでしょか。

「殺してはいけない」。当然です。私達の心に掟があって、その心は「殺してはいけない」「姦淫をしてはいけない」「盗んではいけない」ということがよくわかるのです。「偽証を立ててはいけない」、「隣人のものを欲しがってはいけない」。これらは、神様が私達をさばくために与えたのではなく、人間の幸福を願った神様が、結婚生活、家庭生活、社会生活が平和で幸福になるために与えてくださった教えなのです。これらのものを破ったら、私達は幸福になることができません。姦淫をする。人殺しをする。盗みをする。偽証を立てる。他人のものを欲しがる。そんなことをして、どうして幸福になれるでしょう。

ですから、十戒をとっても、厳しいわけではない。そこにはヘシッド・ラブ、神様の慈愛というものが溢れているように私は受け止めるのです。皆さん、いかがでしょうか。

8 イスラエルに注がれた神の慈愛

それから、数百年経ち、王制が誕生して、王国になりました。初めの王は、サウロ。二番目の王はダビデ。三番目の王はダビデの息子ソロモン。

ソロモンは知恵に満ちた人でしたが、信仰心が欠けていました。初めは信仰的でしたが。彼は美的感覚があって、美しい神殿を建てました。宮殿はさらに美しい宮殿であった。神殿を建てるのに7年、宮殿を建てるには13年かけた。その庭はまことに美しい庭であったそうです。彼は世界中の美しい物、アートを集めました。彼の時代には銀は何の価値もなかった。金しか使われなかったほどでした。彼には700人の妻がいたそうですが、少しもうらやましくありません。一人でも大変ですから。その上、300人のそばめがいたと言います。そんな大勢の人と、セックスなんか、できませんね。美しい人をただそこに置いていた。その中に、外国の女性がたくさんいたのです。

外国人というのは魅力があります。白人しかいないコミュニティで私が牧師をしていた時、娘が生まれましたが、目の細い赤ちゃんを見て、「こんなかわいい子は見たことがない、日本人の子はこんなにかわいいのだ」と言われました。私達は、金髪の子を見るとかわいいなと思います。しかし彼らは、アジア人の子を見ると「なんてかわいいんだ」と言うのです。アジア人はハンサムだ。黒い髪の毛はうらやましいと言うのです。その頃、100名程のクワイヤを会衆の中から見た時、本当に目立つのが私の妻でした。真黒な髪の毛はこんなにきれいなのだとびっくりしたのです。ちなみに、聖書ではカラスのように黒い髪の毛が一番きれいだとされています。

そんなわけで、ソロモンは外国の女達を妻にしました。その女達は皆、外国の偶像を持ってきて、ソロモンは何と、その女達のために宮をつくり、礼拝のために高きところを建ててあげた。それだけでなく、ソロモン自身と一緒に偶像礼拝をするようになった。「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。」という一番根底の、大切なところをソロモンは破ってしまったのです。

彼が死んだ時に、国が分割されます。息子のレハブアムには手腕がなかったが、手下の中にヤロブアムというかなりの手腕を持つ政治家がいました。神が国を二分割し、北は十部族がヤロブアムに与えられてイスラエルと呼ばれるようになり、南はレハブアムにユダとベニヤミン族の二部族が残り、ユダと呼ばれるようになりました。ヤロブアムは、イスラエルの人達が礼拝のためどんどんユダに行ってしまうのを懸念しました。神殿がエルサレムにあるのですから、人々は北で稼いだお金を全部南で使い、献金してしまう。これはまずいと思ったヤロブアムは、ダンとベテルという所に金の子牛をつくり、宮をつくって「これがわれわれの神だ。この神を拜むのだ」と言い、イスラエルの10部族は、金の子牛を拜むようになりました。

それからイスラエルには19人の王が続きますが、全部の王が金の子牛礼拝を続けました。アハブという王は、カナンのパアルという男神を礼拝する。彼が結婚したのは、イゼベルというフェニキヤの女性で、彼女はアシュタロテという女神をイスラエルに広げる激しい決意を持って、宣教のために結婚したのです。その願い通り、全国に偶像が満ちるようになりました。イスラエル博物館に行くなら、当時、どこにおいても偶像礼拝の器具が見つかるということで、発掘された物が展示されています。

唯一まことの神を知っているはずのイスラエルの民が、全員と言っていいほど、偶像礼拝をしたのです。イスラエルの国は250年で滅びました。

十戒の、第一戒、第二戒が破られた時、彼らはすべてを破ってしまいました。アハブ王が市民から勝手に土地を強奪していくのです。そのような王のやり方で国は乱れに乱れ、両親を敬うどころではありません。彼らは殺し、盗みます。王自身が人を殺し、その土地を盗んでいるのですから。社会は乱れ、国は急速に滅びに向かって進み、アッシリヤから軍隊がやってきました。目をくりぬき、耳や鼻をそぐという恐ろしい軍隊です。北のイスラエルは、滅ぼされてしまいました。

アッシリヤが彼らを滅ぼしたと言うこともできますが、彼らが自滅したと言うことも、神がさばいたと言うこともできると思います。

この間、神様は何をしたかと言うと、エリヤを送って悔改めを勧め、偉大なるエリシャと言う預言者を送って、彼は人々の間で活躍し、何とかして彼らがまことの神に立ち返るように勧め、さらに次々と神は預言者を送って、彼らが悔い改めるように、神に立ち返るように促したのです。神は実に、慈愛と、忍耐と、寛容に富んでおられる方でした。待って、待って、待ち続けたのです。

そのことをよく知っているパウロは「神の慈愛があなたがたを悔改めに導くことをしらないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容を軽んじるのか」と言いました。彼らが滅ぼされてしまったのは、神の豊かな慈愛と忍耐と寛容を無視したからです。軽んじたのです。

かたくなさと悔改めのない心、これがユダヤ人の罪、宗教熱心な人々の罪でした。彼らはかたくなであり、悔い改めなかったので、「御怒りの日、すなわち神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げてい」ました。そして、恐ろしいさばきの日が訪れてしまったのです。

9 さばくのではなく、愛すること

律法学者がイエス様のところに来て、「先生、律法の中で、たいせつな戒めはどれですか」と尋ねた時、イエス様は「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」そして、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と答えました。これが中心であり、核であり、土台ですよと言ったのです。宗教ではありません。愛なのです。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」とパウロは言いました。The greatest of all is love. アガペーだ。

私達が人をさばいている時には、最も大切な「愛」を忘れています。私達が愛を忘れると、信仰が宗教になってしまい、人をさばくという傾向が出て来てしまうのです。イエス様は、「そうではない。隣人を愛し、神を愛する愛のだ。愛が大切なのだ。」と言ったのです。ところが私達は、他人のことが目について、どうしてもそのことを言わざるを得ないような傾向になってしまうのです。

最も大切なものは愛だとおっしゃるイエス様のところには、多くの罪人が群がりました。取税人、死体を扱う人達、遊女達。生まれつき目の見えない人や、生まれつき足の歩けない人は、生まれながらの罪人と呼ばれて、のろわれたのだと見られた。両親が罪を犯したのか、本人が罪を犯したのかわからないけれど。そういう人達がごっそりとイエス様のところに集まっている。人々、特にパリサイ人達が気になって仕方がないのは、「こんな人達は救われるはずがない。罪人は救われるはずがない」と決めつけているからでした。パウロもパリサイ人でしたね。彼らは、一体何が起こったのかと調べに行きました。自分達が律法をつくって、それを守らない人をさばいていたわけです。

彼らは、勝手に600以上の律法をつくってしまい、それにそぐわない人々をさばいていたのです。律法主義です。

イエス様の奇蹟の多くは、安息日になされました。安息日こそが、主の働きの場でした。イエス様が安息日に会堂で、片手のなえた人に、「真ん中に出ていらっしやい。あなたの手を伸ばしてごらんなさい」と言うと、彼は腕を伸ばし、真直ぐに伸びました。その時、皆が大喜びしたかと言うと「イエスは罪人に違いない。安息日に人をいやしたのだから」と言い始めたのです。なぜ、それが悪いのか。安息日には働いてはいけないと彼らの決めた律法に書いてあるからです。医者が病人を見ることもいけなかったのです。イエス様はそんなことは無視しました。安息日は人のためにあるのだ。人が休むため、人の幸福のためにあるのだ。人が痛んだり、苦しんでいたら、助けるのが安息日なのだ。ところが彼らは、安息日にこんなことをしたのだから、罪人に違いないとイエスをさばいたのです

10 父の愛

そういう人達に囲まれたイエス様がお話をしました。ある人に二人の息子がいた。弟がお父さんに言った。「お父さん、あなたの身代のうち、私が受け取るべき分け前を、今、与えてください」するとお父さんは自分の身代を二人に分けてあげた。

この話を初めて聞いた時、私は非常に反発しました。この父親はまずい。誤っている。身代をそんな若造に分けてあげるべきではないと私は思ったのです。しかし、父なるお方は財産を分けてあげた。愛する皆さん、あなたは神様から、どんなに多くの財産、遺産を受けているか、測り知れません。あなたの中にはとんでもない才能や賜物があって、幸福の種をあなたの中に持って生まれたのです。このからだの中に、実は、ものすごい財産がパッケージされているのです。神様は、私達が生まれた時に、たくさんの財産を組み込んで下さっています。

ともかく、父親は二人に財産を分けた。弟は自分の持ち物を全部とりまとめて、遠い国に行き、そこで身を持ち崩して放蕩し、その財産を全部使い果たしてしまった。するとその国に飢饉が起り、彼は食べることに窮し始めた。人々は彼に豚飼いの仕事をさせたのですが、彼は豚の食べるいなご豆を食べたいと思うほど空腹であった。飢えた彼は父親を思い出す。「ああ、お父さんのところには雇い人が大勢いるけれど、雇い人でさえ、た

くさんのパンを食べている。息子である私がここで死のうとしているのは、おかしい。さあ、帰ってお父さんにこう言おう。『私は天に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。私はもうあなたの子どもと呼ばれる資格はありません。どうか、雇い人と同様にしてください』こう言って帰れば、お父さんのパンが食べられるかもしれない」と考えて、彼は自分の家に帰って行きました。髪の毛はバサバサに伸び、髭はボウボウになって、何日も風呂にも入っていない、ぼろぼろの姿で、からだを引きずるようにして帰って行ったでしょう。

ところが父は、遠く離れていたのに彼を見つけたのです。どうして見つけれられたかという、いつ帰ってくるかと毎日目を凝らして見ながら、待っていたのです。ぼろぼろの姿の息子を見て、すぐに息子が帰って来たと言って、走って近づき、彼をかき抱いて接吻し、「さあ、息子が帰って来た。最上の衣をこの子に着せ、指輪をはめ、足に靴をはかせなさい。死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。子牛を殺して、音楽家を呼んで、パーティーを開こう」そしてパーティーが始まりました。

「おかしい話だな。」と私は思いました。「私が父親だったら、そうはしない。雇い人の一人にしてくれというのだから、『わかった。雇い人にしてあげるけれど、雇い人と言っても、うちには250人の雇い人がいて、お前は一番下だからね。三年間働いて、本当に後悔していることを示しなさい。初めの年は、寝るところと食べものをあげよう。給料なしで働きなさい。三年経ってよい結果を出したら、私の息子と認めてあげよう』私だったらそうするのに。このお父さん、こんなにやっちゃっていいのだろうか。」

しかし、イエス様のお父さんは、喜びに溢れて、ダンスをして、大喜びして「息子が帰って来た！」と言いました。この父親は、この息子をさばいているのでしょうか。講義をするとか、説法するとか、「これから立派に頑張るんだよ。正しい生活をするんだよ」と一言でも言っているのでしょうか。一切、そういうものはありません。ただ走り寄って、かき抱いて接吻して、「息子が帰って来た」と大喜びしてはしゃいでいる。「これが天の父の姿だよ」とイエス様は言うのです。帰ってくるだけで、自分の持っているすべての祝福を、ドカンとあげてしまう気前のよい父なのです。

11 宗教的な兄の姿

ところが、本当の話はこれからです。「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」さあ、音楽だ。さあ、踊りだ。さあ、御馳走だ。ワインだ。お祝いしよう祝宴が始まりました。

ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、しもべのひとりと呼んで、「これはいったい何事か」と尋ねたのです。しもべ達は家に帰っていて、食事の時間なのに、勤勉なお兄さんは遅くなって畑から帰って来た。近づくと、「おかしい。音楽が聞こえる。踊りを踊っている。みんな楽しそうにパーティーをしている」。彼は音楽、踊り、パーティーや喜びに対して猜疑心を持っている。「クリスチャンが、こんなに喜んでいいのだろうか。クリスチャンが、ダンスをしていいのだろうか。こんな俗っぽい音楽をやって、喜んでいいのだろうか。こんな祝宴をあげて、御馳走を食べて、贅沢すぎないだろうか。信仰というものは、まじめで、辛くて、苦しくて、重荷を負っているのが信仰なのに。こんなに軽々しくて、喜んでいいのか。おかしいよ」、とと思って近づかなかったのです。

兄は「ちょっと来い」としもべを呼んで、「これは一体何事か」と尋ねた。「弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたと言って、お父さんが肥えた子牛をほふらせなさったんですよ。さあ、行きましょよよ。」兄は怒って、家に入ろうとしなかった。「お兄さんは、怒っています。」「では、わたしが行ってみよう」と父親が出て、「さあ、家に入ろうよ。お前の弟が帰ってきたんだよ。一緒に食事をし、ワインを飲み、音楽を楽しみ、ダンスをして、お祝いしようよ。お前がいなかったら、本当のパーティーにならないよ。お前は大切な家族なんだから。」しかし、彼は決して入ろうとしなかった。色々なだめたと書いてあります。しかし兄は父にこう言った。「ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、

友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」

まず第一に、彼は自己義認に陥っています。「私は正しい。戒めを破ったこともないし、努力して頑張ってきた」これは嘘ではないでしょう。そういう面で、立派なお兄さんだと思います。ところが、そのために自己義認に陥って「私は正しいのに」と言いました。それから、突然、みじめになり、落ち込んでいくのです。自己憐憫に陥り、「この私には友達と楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがないじゃないですか」と言いました。このことばに背後には、「お父さんは弟を愛して、私を愛していない。私はこんなにお父さんの言うことを聞いて、こんなに働いて、こんなにお父さんに良くして、こんなに優等生をやって来て…どうしてお父さん、こんな遊女に溺れた弟を愛するの?」と比較して、自分は愛されていないという思いでいっぱいです。

宗教熱心、律法熱心、完璧なクリスチャンが、この兄に似ているのです。熱心なクリスチャンが、多くの場合、内面はみじめである。自分は教会熱心で、こんなに奉仕をして、こんなに献金して、こんなに伝道しているのに、どうして認めてもらえないのだろう。どうして愛してもらえないのだろう。やればやるほど、そういう気持ちになってくることがあるのです。

愛というのは、ただただ愛されるしかありません。一生懸命やって、努力して、「私は価値ある人間だから愛してください」と言っても、不思議に、なかなか愛は得られません。愛というのは、無代価で愛されて、「愛してくれてありがとう。愛されるってすばらしいな」それだけなのです。「立派なことをすれば愛される」と思った瞬間に、「自分は愛されているんだろうか」という疑いの中に入ってしまう。「神は愛しているよ」「ありがとうございます。神様。あなたの愛を受け入れます」というしかありません。

愛というのは、恵みです。赤ちゃんが自分は愛される価値があることを、母親に証明する必要があるでしょうか。赤ちゃんは、自分は愛されていると思うだけで十分です。ところで、赤ちゃんの時は、自分が愛される価値のある人間であることを母親に証明しないのが普通ですが、小学生、中学生、高校生になると、お母さん、お父さんから愛される為に、「あれをやらなければ愛される。これをやれば愛されるのだ」と律法主義を学んで行く。

そして必ず比較が起こります。「どうしてお兄ちゃんの方をそんなに愛するの」「どうして弟がそんなにかわいいの」。そうすると、もっとお父さんから愛される為に、「お兄ちゃんより良くやらなければ」という構造の中に入っていくのです。しかし、そのようにしては「私は愛されている」という意識は持てません。

兄はみじめでした。正しい人でしたが、愛が欠落していたのです。イエス様は愛が一番大切だというのに、愛がありませんでした。お父さんは「お前の弟だ」と言いましたが、彼は自分の弟を弟と呼ばないで” your son” 「遊女に溺れたあなたの息子」と言ったのです。俺とは関係ないという感じです。彼がもし、” my brother” 「私の弟」と言ったら、それだけでもどんなによかったでしょう。

「肥えた子牛をほふった」何というみじめな精神状態でしょう。「私の為には子山羊一匹くれたことがないじゃないか。あなたは私のことを愛してないんだ」と言っているのです。父は彼に言った。「おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」あなたが子山羊が食べたいのなら、お前のものだよ。ほふって食べればいいじゃないか。子羊を食べたいのなら、いいよ。子牛をほふって友達とパーティーしたいのなら、やったらいいじゃないか。お前の自由だよ。あなたが楽しんでいないのは、私の責任ではないよ。あなたはいくらでも楽しめるんだよ。自由にしたらいいじゃないか。私のものは全部お前のものだ。

神様は、律法的な人、すねている人、他人をさばいている人をさばくわけではありません。お前のことも愛しているよ。お前はいつも私と一緒にいるし、私はお前と一緒にいるではないか。私の恵みも祝福も、お前達のものじゃないか。パリサイ人達よ。どうして、すねるの。どうして批判するの。どうしてさばくの。私のものは全部お前のものなのだ。楽しくやろうよ。ほがらかにやろうよ。喜んでやろうよ。

そして、お父さんはまた「お前の弟は」と言います。「だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」当然ですよ。しかし、律法主義に陥ってしまうと、こういう単純なこともわからなくなる危険性をもっているのです。

どうか、私達が単純な心で生きるように。神様を愛し、自分を愛し、自分の隣人を愛して、喜びをもって、単純な生き方をもって生きていきましょう。

お祈り

愛する天のお父様、私達はこの父の愛を知らなければ、このような愛でなければ、決して安心することができません。私達は神の前に自分は価値があるのだということを証明する必要はありません。父の方が、私はお前を愛している、お前は私の心の喜びだ。お前は私の宝だ、祭司の国民だ。お前は聖なる国民だ、わたしはあなたを愛している。あなたは高価で尊いとおっしゃるのですから。

私達はなかなか自分が尊い人間であることがわかりません。そのためにいつも自分が尊い人間であることを証明しようとして汲々としていますが、私達が神様の愛を受け入れ、神様の愛を喜ぶことができるようにしてください。神様がその御手をもって私達を形作ってくださるのですから、この方を信頼し、おゆだねしていくことができますように。どうか、私達が自分をさばくことと他人をさばくことから解放されていくことができますように、主よ。祝福してください。